

チャイルドライン とちぎ



認定NPO法人チャイルドラインとちぎ広報部
〒320-0837宇都宮市弥生1-6-3
Tel&Fax 028-614-3253
E-mail info@cltochigi.org
http://cltochigi.org

チャイルドラインは18歳以下の子どもの話を聴く活動です。現在、全国のチャイルドラインが連携し、毎日16～21時までフリーダイヤルでつながります。2018年からオンライン相談も開設しています。

コロナ禍の安心感

宇都宮短期大学附属中学・高等学校 校長 須賀 英之



「新型コロナウイルス」の流行は、オンライン授業など教育の新しい可能性をもたらす一方、黙食の実施や行事の中止により、「協働」を体験的に学ぶ場である学校にあっても、直接的なコミュニケーションが制限されるといった矛盾を生み出しました。

社会に広がる不安が、感受性豊かな子どもたちの心に忍びこむ懸念がある今、彼らを受けとめて寄り添い、再起するきっかけを与える存在が必要です。

抑圧された感情を表現することで心の緊張が解かれることを、心理学では「カタルシス効果」と呼びます。私は、信頼できる他者に自らの悩みを「語る」ことが大切と考えています。話をよく聞いてくれる人がいるという安心感から、子どもたちは癒され、自身を表現する言葉を紡ぎだすことができます。

「チャイルドラインとちぎ」の活動により、多くの子どもたちが生きる希望を見つけ、前に向かって歩みだしてきた実績がそれを証明しています。

本校では、秋晴れのもと、真新しいカンセキスタジアムで、保護者を含めて約5,000名が集う大運動会を開催しました。印象的だったのは、大縄跳びです。学科コース対抗ということもあり、真剣そのもの。優勝したチームは、動作のシミュレーションや動画撮影などを行って作戦を練り、練習を重ねました。輝くような笑顔の生徒たちに、協働の意義をあらためて実感しました。

本校は全人教育の理念のもと、「一人は一校を代表する」という生活目標を掲げています。これは「自らの価値を知り、相手の価値も尊重する心を育む」ことを意味しています。

学校は、いかなるときでも、語らい、受けとめ合い、認め合う協働の精神を養う場でありたい、と願っています。

この冊子は2021年度日本郵便年賀寄付金の助成を受けて作成しました。



地域とつながる子どもの居場所 ～「もうひとつの家 アットホームきよはら」を訪ねて～

コロナ禍により、ふれあいやコミュニケーションが大切なところほど、通常の活動が制限されています。「子どもの居場所」も例外ではありません。「もうひとつの家 アットホームきよはら」がこのコロナ禍でどのように運営されているのか、お話を伺うことにしました。

10月12日に施設を訪問。塩澤達俊さん（とちぎYMCA常務理事、地域包括支援センター清原センター長）、山口亮二さん（子どもの居場所「もうひとつの家 アットホームきよはら」運営責任者）、田沼瞬さん（子どもの家Gブロック統括管理者）の3人の方が、それぞれの立場でお話をしてくださいました。

生活習慣も身につける

「もうひとつの家 アットホームきよはら」（以下、アットホームきよはら）は、栃木県では9番目、宇都宮市では2番目に設立された「子どもの居場所」です。「子どもの居場所」とは、宇都宮市要支援児童健全育成事業の一環として設けられました。学童保育のように希望者が皆利用できる場所ではなく、在宅では十分な養育が受けられない子ども、子育てが困難な親へ支援することで、子どもたちの自立を促進し、虐待や貧困の連鎖を断つことを目的とする公的支援の場所です。

■基本方針

- ① 受けとめてくれる人がいる場であること
- ② 休息の場であること
- ③ 寄り添い、ともに行動する人がいる場であること
- ④ 自尊感情を回復、獲得する場であること
- ⑤ 途切れることのない支援であること



プレイルールの畳コーナー

現在14名の子どもたちが週に2回通っています。遊んだり勉強をするほか、食事、入浴、洗濯、食事の後は歯を磨くなど、基本的な生活習慣を身につけます。学習支援をはじめ、遊び、余暇活動を通した体験にも重きを置き、個々のニーズに応じた支援は、子どもたちだけでなく保護者にも及びます。

■一日の流れ

- 14：30～ 送迎（学校へ迎えに行きます）
- 16：00～ 遊び・学習・入浴など
- 18：00～ 晩ごはん（手作りの食事です）
- 18：40～ 余暇
- 19：00～ 送迎（自宅まで送り届けます）

この施設を始めたころは、スタッフの雇用も難しい状況でした。活動が認められ、徐々に国や県等による予算が付き、スタッフも増やすことができたことが、いつも待っていてくれる人がいるという子どもたちの安心感につながったそうです。

多様な人とのふれあいが当たり前になるように

アットホームきよはらは、社会福祉法人とちぎYMCA福祉会が運営しています。とちぎYMCAは保育園、幼稚園や老人介護施設などあらゆる世代を対象に福祉事業を展開、社会問題解決のためにボランティアなどさまざまな活動もしています。



みんなの手形

そのYMCAが母体となる老人施設内に当初作られたアットホームきよはら。お年寄りと子どもと一緒に過ごすことによる相乗効果が期待される、新しい子どもの居場所のスタートでした。しかし、コロナウイルス感染症予防のために分割され、現在地に移転。コロナ禍による最も大きな影響が、この移転だったと思われます。

高齢者との直接のつながりは、残念ながらなくなりましたが、移転先は海星女子学院中学校、高等学校に近く、今度は地域の学生ボランティアさんとの交流が始まりました。地域とつながり、多様な人と関わることを大切にする運営方針が、また別の形で実践されています。



— それぞれの感想 —

取材後報告を行う中で、特に印象に残った点がさまざまな角度から挙がってきましたので、各人が感想としてまとめました。



ここでお話を伺いました



「つながる」ことは大切なこと

世代が分断されて、かつてあった地域の力も薄れている今、物だけでなく教育、さまざまな経験、人とのつながりなど「関係の貧困」が子育てに影を落としていることを痛感しました。

それぞれ抱えている問題は違っても、YMCAのネットワークを生かして、いろいろな世代の人との交流や体験、日々見守ってくれる方々との信頼関係を少しずつ築いていく中で、子どもたちが人っていいなと感じて、少しでも前向きに変わっていったらいいなと願います。

「子どもを真ん中にして周りも共に育つ」

「プロの人がやることと、市井の人との中間の存在でありたい」

との熱い思いに感動しました。

チャイルドラインでも一期一会の出会いの中で多くの学びを頂いています。50万都市宇都宮でもまだ子どもの居場所は2カ所しかないそうです。「できれば中学校区にひとつ」本当に必要な人に、スムーズに支援が繋がるようになってほしいと思います。

「アットホーム」だからこそ

いかに子どもの状況が悲惨で、十分な養育が受けられない場合でも、ネグレクトのレッテルを貼ることはできません。子どもに対する愛情はあっても親自身がどのように子育てをしたらよいのか分からないだけだったりするからです。



たくさん並んでいる歯ブラシ

アットホームきよはらに子どもが通い、安定安心な日常生活（食事、入浴、家庭学習、歯磨き、洗濯、遊びなど）を過ごし、子どもが精神的に落ち着くことで親御さんも変化していく傾向が見られるそうです。

時に、送迎の車内でスタッフと交わす何気ない会話から、子ども自身の変化や、普段聞けない親御さんや家庭の様子をうかがい知ることがあるからです。スケジュールの中の一つである送迎は単なるスケジュールではなく、大切なコミュニケーションの場所になっているとのことでした。そこには、子育てを一段落した世代のスタッフさん達の温かい心配りと、文字通りのアットホームな居場所があるからこそ、と感じ入りました。

* 開かれていくしくみと守られていくしくみと *

アットホームきよはらは、YMCAが母体であり、とちぎYMCAの体験プログラムに、きよはらの子どもたちが参加することもあるそうです。

これは、子どもたちの体験、気持ちを広げるだけでなく、とちぎYMCAの青年リーダーたちにもたくさんの学びがあると聞きました。海星女子学院の校内には、アットホームきよはらを支援するフードバンクがあります。

一箇所一拠点だけで頑張らない、ほかの子どもの施設と野菜を融通しあったり、運動会を共同で開催（今年が3回目）しています。

少しずつ枠を広げていくことが少しずつ世の中を変えていくのだと思います。アットホームきよはらの緩やかに社会を巻き込んでいく方法が、とても温かく感じられました。

* 平等への強い思いを感じました *

キャンプやスキー教室など、YMCAでの思い出を持つ人は多く、古くから地域に根ざした団体であることが分かります。キリスト教を背景にした世界規模の団体ですが、信仰の規定や勧誘などは一切行われないことも特徴です。

とはいえ、自分とは遠い世界の人々と積極的に関わりを持つことや、自分より弱い立場の人にはすすんで手を差し伸べることが当たり前に行えるなど、人種、階級などを超越した平等への思いは、活動理念にあるキリスト教の精神に深く関係があるように思います。

二度の震災で意識が高まったとはいえ、まだまだボランティア後進国といえる日本。そしてこのコロナ禍。地域のコミュニティ力の減退も懸念されるわが国で、共助の精神をどのように培い、維持していけばいいのか。アットホームきよはらへの取材でさらに考えています。

支援員・相談員のための コミュニケーションと怒りのコントロール

一般社団法人栃木県社会福祉士会 事務局長 野尻政彦氏

11月7日（日） とちぎ青少年センター



社会福祉士・精神保健福祉士として高齢者施設や障害者施設で勤務された野尻氏。

支援者として生じた心の葛藤から怒りやコミュニケーションについて学び、それを実践してこられた方です。お話の中でも特に怒りの性質・コントロールについては大変興味深かったので、私たちなりに学んだことを報告します。

○日ごろからポジティブなコミュニケーションを心がける

コミュニケーションにはいろいろな側面がありますが、日ごろからポジティブなコミュニケーションを心がけることは大切。そのポイントは想像力と創造力です。想像力とは思いやり。相手の心情、



真剣に聴き入る参加者

そこへ至る背景や経緯までもも思って、相手の話を聞く、相手に自分の話を伝えるといういいないやり取りをすることで、各々に共感の気持ちが生まれるといいます。創造力とは、相手が本当に必要としている言葉がけや支援は何かを考え、作り出すこと。これには、相手を的確に観察することが求められます。

4つの怒りの性質

- ・強いところから弱いところに流れる 親から子へ、先生から生徒へなど
- ・親しい人や身近な人の間で起こりやすい 親しいから何でも言えると思いがち
- ・連鎖しやすい 1対1のいじめが集団へと発展。怒鳴り合う家庭環境が影響も
- ・行動のエネルギー源になり得る 我が身を守る警報でもある。状況改善への行動の契機にもなる

○怒りの裏に潜む別の感情 怒りのメカニズム

なぜ人の心に怒りが生まれてくるのでしょうか。怒りには、自分が認められなかった、期待が裏切られた、傷ついたといった、怒りの対象とは別の体験での感情が隠されていることが多いと知り、ギクリ。こういった出来事が、「～べき」に縛られる絶対的な信念を形成し、それが怒りの感情を生むというのです。

絶対的な信念はときには必要ですが、とらわれ過ぎると苦しそうです。絶対的な信念を柔軟な考え方に変えること、他の選択肢を持っていることでつらさは和らぎます。認知行動療法では、①認知と感

情を分けて考える。②別の可能性を考える。③考え方の癖をチェックし、「～べき」に気づく。④考え方の癖を修正していく。という4つのステップが有効です。

○ 「～べき」を見直してみる

怒りの対処の仕方さえ身につけられたら、自分の力にすることもできます。具体的な怒りの対処方法として、タイムアウト（怒りのピークは6秒。その場から離れクールダウンする）、コーピングマントラ（「大丈夫」「まあいいか」など、心を落ち着かせる言葉を持つ）などを学びました。また、スト



グループワークでの話し合い

レスへの対処として、3つのR（レスト・レクリエーション・リラックス）を得られる自分なりの方法をいくつか用意しておくなどは、すぐにでも実行できそうです。

後半は、それぞれの「～べき」を発表するというグループワークをしました。自ら発表したり、他の人の意見を聞いたり、グループで話し合うことで、人それぞれ違った受けとめ方があることが分かって、今までの自分の「～べき」への考え方が少し変わったように思いました。

【講演会レポート】

第12回 子ども虐待をなくそう！県民のつどい

テーマ「虐待サバイバーが社会を変える～子ども虐待、最前線」

11月28日（日）栃木県総合文化センターサブホール

児童虐待防止月間である11月に毎年開催される県民の集いも第12回。

今年は今一生氏（フリーライター・編集者）をお迎えしました。

開会の挨拶で、今までに虐待で失われた幼い命に参加者全員で黙祷を捧げ、ご冥福をお祈りしました。

講演では、社会的養護の充実を目指しつつも、コロナ禍で虐待件数が増え、児童相談所では職員（児童福祉司等）を増やしても激務で離職率が高く、人材が育たない現状。子どもの人権・親権について、学校で児童・親・教師が学べる機会を作ることにより、早めに虐待を自覚し保護などで救われやすくなる。などたくさんのアイデアを話してくださいました。

座談会では、サバイバー（幼い時、親からの虐待を受け施設で育った当事者）のお二人の体験談に胸が痛みました。現在はとても幸せそうで安心しましたが、心に負った傷は癒えないとお話しされていました。

閉会の挨拶では、星俊彦氏（青少年の自立を支える会理事長）の子ども虐待をなんとかしてなくさなければ、という熱い気持ちに感動しました。

親の意識を変えることが難しい今、かかわる地域社会が子どもたちを見守っていくしかない、サバイバーたちの声を聴いて思いました。



体験を語る当事者たち

トピックス

「私たちは『買われた』展」

11月13日(土)、14日(日) 宇都宮文化会館 第一、第二展示室

認定NPO法人ウイメンズハウスとちぎ主催のパネル展は、新型コロナウイルス感染予防策のため、当日券なし、前売りチケットのみで行われました。

展示されたパネルは、虐待や性暴力にあうなどした10代女性を支える活動を行っている「一般社団法人Colabo」と、その「Colabo」とつながる少女たちのグループ「Tsubomi」のメンバー(中高生世代を中心とする10～20代の女性)が企画したものです。

写真パネル、そして、買われるに至るまでの背景(学校でのいじめ、家庭や施設での虐待、暴言等)と、受けた性暴力や性搾取の被害実態を文章で記したパネルが展示されていて、来場者は皆、丁寧に読んでいました。想像を絶する過酷な内容でした。そのような経験をした少女たちが、声を上げたのは、大人たちの責任を問い、「売春=気軽に遊ぶ金欲しさ」という世間のイメージに一石を投じるとともに、子どものSOSに気づける人、その背景に目を向ける人を増やしたいという思いからです。

今回「私たちは『買われた』展」が、ドメスティックバイオレンス(DV)という言葉が無かった頃から、被害女性を救おうと立ち上がり活動しているウイメンズハウスとちぎの25周年記念特別企画として開催されたことにも大きな意義を感じさせるパネル展でした。

※チャイルドラインとちぎは、2018年9月、Colabo主催の「夜の街歩きスタディツアー」に現地研修として参加しました。ウイメンズハウスとちぎは、チャイルドラインとちぎと共に「子ども虐待防止ネットワーク」の構成団体です。

サンタdeクリーン&ウォークに参加 12月19日(日) バンバ広場

サンタになってパレードやゴミ拾いをして子どもの貧困問題や寄付を広くアピールするチャリティイベント「サンタdeクリーン&ウォーク」が開催され、多くの参加者が集いました。街頭募金も行われました。イベントの寄付は子どもたちを支える活動に使われます。チャイルドラインとちぎは警備ボランティアとして参加しました。



事務局に『空気清浄機』等が入りました！



公益社団法人JKAからの「新型コロナウイルス感染症の拡大防止策に対する支援(競輪補助事業)」によって『空気清浄機』『サーモカメラ』『アルコールディスペンサー』が入りました。

子どもたちの声を聴き続けるためにも、さらなるコロナ対策に努めていきます。

ご支援ありがとうございました

令和3年7月～令和3年12月

個人

飯塚 真玄 大島 誠 下牧千佳乃 手塚 清美 福本 佳之 丸山由美子
飯塚 有美 小川 直人 鈴木千鶴子 栃木さおり 古澤 利通 麦倉 敬亮
生田 敦 柏崎 和枝 高井 真二 中島 潤 保坂利佳子 村山 直樹
石川 公則 片桐 秀子 竹内 望 成田 和美 細内千佳子 村山 雅子
稲見 裕子 菊池 房子 蓼沼 真弥 西根 美香 増渕 信子 山野井 暉
猪瀬 和典 黒崎 佐代 田中 徹 野口 浩志 松江桂四郎 横田 京子
宇梶 武夫 小松 玲子 谷 博之 野中 友則 松江比佐子 吉益 千景
枝野 滋子 近藤 和子 田野実栄一 長谷川央子 松江 真堯 若色美佐子
大木いずみ 島崎あや子 田村 昌久 福田 容子 松江 桂堯 渡邊 正芳

団体

相沢商会(有)
アトリエ松江
あんどうこどもクリニック
おかべこどもクリニック
くろさきこどもクリニック
株小牧工業
福田こどもクリニック
松田歯科クリニック
株渡辺有規建築企画事務所
(敬称略・五十音順)

公開講演会 「共に生きる子どもたちを育むために」

講師 副島 賢和 (そえじま まさかず) 氏

昭和大学大学院保健医療学研究科准教授、学校心理士スーパーバイザー。
院内学級を描いたドラマ『赤鼻のセンセイ』のモデルとなる。

日時 2022年 4月10日 (日) 14:30～16:30 (14:00開場)

会場 とちぎ福祉プラザ 多目的ホール

*申込み・問合せ先 チャイルドラインとちぎ事務局
Tel/Fax 028-614-3253 E-mail info@cltochigi.org



*新型コロナウイルスの感染状況により開催内容が変更になる場合はHPでお知らせします

チャイルドライン支援のお願い

チャイルドラインとちぎは認定NPO法人です。当法人への寄付に際しては、税法上の優遇措置を受けることができます。フリーダイヤルを継続していくために、ぜひご支援くださいますようお願い申し上げます。

支援会員 個人一口 3,000円 団体一口 10,000円 ※何口でも結構です ※任意の寄付金も受け付けています

郵便振替 口座番号 00120-2-659158

加入者名 チャイルドラインとちぎ

銀行振込 栃木銀行において本会の趣旨に賛同くださり、本会所定の振込用紙による同行本支店の振込手数料を無料扱いにしてくださいました。お振込みの場合は下記に「振込用紙」をご請求ください。

問合せ先 チャイルドラインとちぎ TEL・FAX 028-614-3253 E-mail info@cltochigi.org